



神論



第二章 神・三位一体

2.1. 生きておられる、真なる神は（Iテサロニケ 1:9、エレミヤ 10:10）、ただ一人おられるだけです（申 6:4、Iコリント 8:4,6）。神は、存在と完全性において無限であり（ヨブ 11:7 - 9, 26:14）、極めて純潔な霊であり（ヨハネ 4:24）、目で見ることができず（Iテモテ 1:17）、体の肢体もなく（申 4:15 - 16、ヨハネ 4:24、ルカ 24:39）（人のようで）、欲情も無く（使徒 14:11, 15）、変わることもなく（ヤコブ 1:17、マラキ 3:6）、遍くおられ（I列王 8:27、エレミヤ 23:23 - 24）、永遠の方（詩 90:2、Iテモテ 1:17）、計り知ることのできない（詩 145:3）、全能の方（創 17:1、黙 4:8）、知恵に富み（ロマ 16:27）、極めて聖であり（イザヤ 6:3、黙 4:8）、極めて自由な（詩 115:3）、極めて絶対的で（出 3:14）、ご自分の変わらない、最も正しい御心の計画に従い（エペソ 1:11）、ご自分の栄光のために（箴言 16:4、ロマ 11:36）、すべてを行われ、全き愛に満ち（Iヨハネ 4:8, 16）、恵みはとこしえまで、憐れみ深く、長く忍耐なさり、誠実と真実に満ち、不義と背きの罪を赦し（出 34:6 - 7）、ご自分を熱心に求める者には報いを与え（ヘブル 11:6）、同時に、極めて公正の方、その審判は恐ろしく（ネヘミヤ 9:32 - 33）、すべての罪を憎まれ（詩 5:5 - 6）、刑罰を受けるべき者を、決して赦免しない方です（ナホム 1:2 - 3、出 34:7）。

ウェストミンスター信仰告白書は、神学的に精巧な構造を持っています。聖書から始まった理由は、神がご自分を啓示されたことを強調しながら、ただ聖書を通して神を明確に知ることができるとしています。信仰告白書は、聖書、次の主題は、神に対することです。この項での言及は、三位一体教理に対する異端たちに関する正統な教えの叙述です。先ず、互いに異なる三人の神がいると主張しながら、三つの位格が一つの本質によって結合されていることを否定する三神論は異端です。キリストの神性と聖霊の神性を否定するアリアン主義は異端です。キリストの神性と聖霊の神性を否定しながら、神は形体と体があると主張するソツィーニ主義は異端です。神は純粋な霊であるのに、この教理を否定しながら、神は形体を持っていると主張する、神人協同説論も異端です。信仰告白書を作成する当時、クエーカー主義者たちは、神の神性に三つの位格があるのを否定しましたが、これもやはり異端です。

1項において、神の属性に対する説明を、生きておられる、真なる神によって始め、後半では、ご自分を熱心に探す者には報いを与えてくださると言及しています。それは、神を知る知識がただ知的なことだけではなく、経験的で実践的なことを意味するのです。つまり、神を知る知識があれば、必ず、神を探すようになっていることを意味します。もし、神を知っていると言いながら、神を探さない者は偽り信仰告白者で、偽善者だとしました。ジョナサン・エドワーズ時代から、それを「探し求める原理 (seeking theory)」と呼びました。ここで、清教徒神学の正義と原理を発見することができますが、神学の目的は、神の御前に敬虔な生活のためであり、その方法と原理は教会のためなのです。従って、教理を説明するに当たって、経験的なものを含めました。

2.2. 神は、おん自ら、すべての命（ヨハネ 5:26）と栄光（使徒 7:2）と、善（詩 119:68）と、幸福（I テモテ 6:15、ロマ 9:5）を持っておられます。神は、お一人、ご自身のうちで、そして、ご自身に対して完全に充足していて、ご自分が造られた被造物の助けを必要とせず（使徒 17:24 - 25）、彼らから、どのような栄光も求めておらず（ヨブ 22:2 - 3）、むしろ、彼らの中に、彼らを通して、彼らに栄光を現し、示すだけです。神だけが、すべての存在するものの根源であり、すべてのことが神から出て、神によって成り、神に帰するのです（ロマ 11:36）。神は、すべての物の上に絶対的な主権を持っていて、それらによって、それらのために、あるいは、それらの上に、ご自分の良しとする時に行います（黙 4:11、I テモテ 6:15、ダニエル 4:25, 35）。すべては、その目に開かれていて（ヘブル 4:13）、その知識は無限で、無謬で、被造物に依存しません（ロマ 11:33 - 34、詩 147:5）。従って、神には偶然や不確実なものはありません（使徒 15:18、エゼキエル 11:5）。そのすべての計画と、すべての働きと、すべての命令において、神は極めて聖であります（詩 145:17、ロマ 7:12）。御使いたちと人々、他の被造物は、神が要求する礼拝や奉仕や従順をもって、神に、当然捧げなければなりません（黙 5:12 - 14）。

2 章 2 項で強調するのは、神の絶対主権です。神は人間の助けを必要とせず、人間にどのような負債も負ってはいません。そして、神は、ご自身の絶対主権を持ちながら、ご自身が求めるままをみな行います。2 項で、このように叙述された理由は、その当時のアルミニウス主義たちによることです。アルミニウス主義者は、救いにあつて神の絶対主権を反対します。救いが人間の意志の決定にかかっていると主張します。しかし、これは神の主権があるべきところに、神の主権を無くさせることなので、誤りです。

20 世紀に起こされた現代福音主義運動もアルミニウス主義のフレームに閉じ込まれています。伝道小冊子には、意志の決定を信仰と見ています。それで、私の意志を添えてキリストを信じると言えば救われるとします。救いが、人間の意志の決定にかかっているのです。それで 2 章 2 項では、神は、被造物の助

けを必要としない方だと言うのです。さらに、神の知識が人間である被造物に依存されないことを語ることで、神の知恵と知識の深さに対して、私たちは決して到達することができず、人間は謙遜であるべきだと語っています。

2.3. 神の単一の神性において、永遠性を持ち、本質と力が同一な三位の神です。すなわち、御父と御子と聖霊が存在します（Iヨハネ 5:7、マタイ 3:16 - 17, 28:19、IIコリント 13:13）。御父は誰にも属さず、誰からも生まれもせず、出ることもなく、御子は御父から永遠に生まれ（ヨハネ 1:14, 18）、聖霊は御父と御子から永遠に出られます（ヨハネ 15:26、ガラテヤ 4:6）。

2章3項の項目は、三位一体教理に対する叙述です。聖書は、神がお一人であることと（Iテモテ 2:5）、三位が結合されていることを語っています（マタイ 3:16-17）。そして、分ける事の出来ない、神性において互いに区別されて三つの位格として存在します。位格は三つですが、本質は一つです。三つの位格は各々特性によって互いに区別され、存在と働きにおいては一定の順序によって啓示されます。聖書に明白に啓示されている教理であり、私たちの救いを理解するために絶対的に必要な教えです。つまり、三位の神の救いの働きを理解するようになれば、私たちに救いがどのようにして起きたのかを知るようになります。自然の光や、理性の推論によって三位一体教理を理解することはできません。

ウェストミンスター信仰告白書にこのように叙述した理由は、その時代にも、やはり三位一体教理に対する異端たちがいたからです。清教徒の当時にも、キ

リストは卓越だが、被造物だと主張するアリアン主義者がいました。勿論、キリストがマリアの体に身ごもる前には存在しなかったと主張するソツィーニ主義もいました。ソツィーニ主義者たちが主張するのは、御父がキリストに聖なる真理を伝える使命を与え、死を通してその真理を確証され、復活の後に彼を高く挙げ、宇宙を治めるようにされたので、神の御子と呼ばれるようになったと主張しました。

彼らは聖霊の神性も否定しました。勿論、この項目で、三つの位格の存在と働きにおいて、一定の順序として啓示されていると叙述することで、従属説を排除しました。従属説とは、三位間の関係が従属の関係になっていると主張することです。それで、ウェストミンスター信仰告白書は、三位の経綸的（贖いの実現）順序だと語ったのです。勿論、この項目において東方教会の主張が誤りだというのを表わしています。東方教会は、聖霊が父からだけ出ると主張しました。しかし、これが誤りです。聖書では、特にヨハネの福音書では、父と子との間の交わりの中で聖霊を遣わす時、父の選びと、子の贖いが、聖霊によって適用されることを強調しています。

勿論、21世紀のこの時代にも三位一体教理にあって、ウェストミンスター信仰告白書の叙述から外れた教え等々があります。現代ペンテコステ運動の中で、聖霊だけを強調して、父と子の位格と働きを無視する、単一神論的ペンテコステ運動 (oneness pentecostalism) があります。現代ペンテコステ運動は、実際、聖霊の救いの働きと一般の働きとを区分できないところに問題点があります。聖霊の働きにおいて優先となるのは、父と子によって遣わされる目的が、救いの適用の働き、あるいは、特別な働きです。その次に、教会を建てるためにキリストが職務等々に就かせ、聖霊の賜物を与え、聖霊による一般的な働きです。ところが、現代ペンテコステ運動は、聖霊の特別な働きは後ろにして、一般の働きを最も重要視していることです。これもやはり、三位一体教理を正確に理解していないことであり、誤りに該当されます。